

もし、鏡の向こうの自分に別の人格があったとしたら、あなたならどうしますか？

そして、誰か名案のある人がいたら、どうか僕に教えて下さい。

何せ鏡の向こうの僕ときたら、手が付けられない程の強かな奴で、僕はもうほとんど困っているんですよ。



僕が初めて《あいっ》に逢ったのは、明け方近くまで試験勉強をしていた所為で、つい寝坊してしまった朝の事。

「うわっ!! もうこんな時間じゃん。早起きして勉強しようと思ってたから、ノート半分も覚えて無いのに」

慌てて制服に着替えた僕は、髪を梳かす為、壁に掛けてある鏡を覗いた。まさにその時だった。

「……? あれ? 僕、何をしようとしてたんだっけ?」

最初、自分が起こったのか、判らなかつた。

左手に持った櫛を見て、やっと鏡を覗いていた事に気が付いた。

鏡の筈なのに、そこには自分の顔が、何故か映っていないかつたのだ。

「何だ、故障か。びっくりさせるなよな。って、あれっ?」

一瞬納得しかけた僕は、自分の考えの矛盾に思い当たると、愕然となつた。

嘘だ!! テレビじゃあるまいし、鏡が故障なんておかしいだろう。

いや、落ち着け!! そんな事、ある訳がない。現に、部屋の中はちゃんと映っているじゃないか。

僕は鏡の向こうに映っている自分の部屋を、隈無く見回した。

「何だ、まだ寝ただけか。もお、びっくりさせるなよな」

ベッドの中でまだ眠っている自分の姿を見付けると、僕は安堵の息を吐き出した。

あれ? 何かおかしくないか?

暫く考えてから、漸く、そのおかしさが何なのかを理解した。

「うわあ!! 何、ホツとしてるんだ。これは鏡なんだぞ!! こつちとズレ

てて、どうするんだよ。おい!! 起きろ、起きろってば!! もう朝だぞ!! このままだと遅刻だぞ!! 試験に遅れるだろう!! おい、頼むよ。こつちの世界とズレてるんだってばあ!!」

僕は、泣きたいのを堪えて叫び続けながら、何度も鏡を叩いた。鏡の向こうの《あいっ》は、僕の必死の訴えをまるで無視するかのよう、一度大きく伸びをすると、そのまま眠り込んでしまう。

「こら、寝るな。今日の試験は、すっごい大事なんだよ。たとえ出来なくても、受けておくだけで、赤点は免れるんだからさ。お前だって、放課後の補習は嫌だろ!! だから、頼むから起きてくれよお!!」

「煩いなあ。いつまで寝てようと、俺の勝手だろう。試験なんか知るかよ」

いい加減、起こすのにうんざりしてきた頃、漸く《あいっ》が寝惚け声を

出しながら起き上がる。

鏡のこちら側から、情けない顔で覗き込んでいる僕と目が合うと、

「よお」

そう言つて軽く手を上げた。それを見た僕は、またまた愕然とする。

こつちの世界とズレてるっていうのに、《あいっ》ときたら、まるで何事も無いかの様に、平然としているんだからな。絶対、あり得ないよ!!

「何だ、今頃気が付いたのか。もう大分前からだよ。俺達がズレ始めたのなんてのはな」

啞然としている僕の表情を読み取つたのか、《あいっ》は涼しい顔をしながら、そんな事を言い始めた。

前からって、いつたい何時だよ!!

「今までは、俺が上手い事、お前に合わせてやってたんだよ。だからまあ、気が付かなくても、無理は無いかもな。ただ、夕べはつい調子に乗って、遅くまで飲んでちゃってさ。帰つたのは明け方の、三時は過ぎてたかもな。お陰

で、つい寝坊しちまつた」

「そんな時間、僕はまだ勉強してたよ!! 今日試験なんだから」

同じ寝坊でも、こうも理由が違うなんてあるのか。

僕は自分の事ながら、呆れてしまった。

「まあ、バレたんなら仕方がない。これからは自由にやる事にする。お前も

なるべく、鏡の前は避けて生活しろよ」

「勝手な事、言うなよな。鏡の前を避けて生活なんて、そんな簡単に行く訳ないだろう？ だいたい、お前は僕の鏡なんだぞ」

僕が泣きたい気持ちでそう言うと、先刻まで僕が困ってるのを揶揄い口調で笑っていた《あいづ》が、急に凄んだ顔で睨み付けてくる。

「ちよつと待て、おい。誰がお前の鏡だつて？ そんなの、逆だろう？ 鏡はお前だよ、お前」

そう言つて、《あいづ》は鏡の向こうから、僕を指差した。

そんなに強調しなくても、良いじゃないか。それに、そもそもそんな事、あり得ないよ。

「嘘だよ。だつて僕には、小さい頃の記憶だつてちゃんとあるんだからな。だいたい、ズレる前までの僕は、そんな夜中まで飲み歩くなつて事、絶対しなかつた」

「あつ、そう言えばそうだな。まあ、そんな事どうだつて良いか。今はもう、俺とお前は別人つて事だけは確かなんだ。さあ、もう一眠りするかな」

さすがに、鏡一枚隔てても、この単純な性格だけは僕のままで。

先刻まで僕を睨み付けてた癖に、今は不抜けた顔で欠伸なんかしてるんだからね。本当、嫌んなるよ。

「お前さ。先刻からボケツとしてるけど、学校行かなくても良いのか？ 試験、試験つて、喚いてた癖に」

「いけない!! 思いつ切り、遅刻だ」

《あいづ》に言われるまで、すっかり試験の事を忘れていた。

放課後の補習なんて冗談じゃない。これからアルバイトを探そうと思ってるんだから、放課後を潰されるなんて、それこそ勘弁して欲しい。

大慌てで鞆にノートを突っ込むと、チラツと鏡を覗いてみる。

《あいづ》が、悠々とベッドに寝転がっている姿が、目に留まった。

まったく、いい気なもんだよな。大体、これから僕は、どうやって髪を梳かせば良いんだよ。

うんざりと溜め息を吐くと、部屋を出て行くこととする。

扉を開ける為にノブに手を掛けようとした瞬間、扉が自動的に開いた。

「圭介!! いつまでノンビリやつてるの!! 学校、遅刻でしょう。つて、貴方、何してるの?」

あんまり遅くて、母さんが般若のような顔で、僕の部屋に駆け込んで来る。

僕は慌てて、鏡を背中中で隠すようにして、壁に貼り付いた。

ベッドの中で眠っている《あいづ》を、見られないようにする為に。

それを見た母さんは、不思議そうな顔で、僕に尋ねてくる。

「別に何もして無いよ。今、下へ降りて行く所だったんだ」

「何か変ね。後ろに何を隠してるの? ちよつと、見せてもらん。ほら、良

いから見せなさいつてば。こら、何隠してるの。圭介!!」

「痛い。母さん、痛いつてば。何も隠して無いから。本当だつて。何も隠し

て無いよ。遅刻するから、僕もう行くからね」

腕すくで壁から引き離そうとする母さんに閉口して、投げ出してあつ

た鞆を掴むと、部屋の外へ飛び出した。

母さんの注意が僕に向いているなら、僕がその場から居なくなれば、早々

と部屋を出て行く筈だよな。

「いつてきます!! つとと、うわあ!!」

あんまり慌てて飛び出した所為で、勢い良く階段から滑り落ちてしまう。

「ちよつと、圭介? 貴方、大丈夫なの?」

母さんの声が上がって聞こえてきた気がしたけれど、その時には意識は何処

か遠くへ飛ばされた後だった。

結局その日は、脳震盪を起こして学校を休んでしまい、遅くまで頑張った

試験勉強はすべて無駄になり、放課後の補習は確実の結果となる。

《あいづ》はと言つて、僕が寝ているのを良いことに、堂々と学校をサボつ

た挙句、

「ほんつとトロイなあ、お前。元は俺と同一人物だなんて、誰も信じちゃく

れないぞ」

そう言つて、頭のタンコブに氷を当てる僕を見ながら、大笑いしていた。

自分自身に笑われたり、呆れられたり、本当情けないつたらないや。

ああ、頭痛い。タンコブの所為じゃないからね!!

その日以来、《あいつ》の奔放振りときたら、僕を困らせて楽しんでるかと思えない程だった。

鏡の前を通る時、僕が通り過ぎるのをしっかりと確認してから、鏡の中に姿を現したりする。たとえ、周囲に人が居ようと、まるでお構いなしだ。

僕に向かって舌を出した《あいつ》を、鏡越しに見た友達が、勘違いして怒り出した時には、必死で言い訳しなくちゃいけなかったんだぞ。

お陰で僕は、すっかり鏡恐怖症だよ。

ああ、そうそう、自己紹介がまだだっけ。愚痴ってる場合じゃないよね。僕の名前は、杉田圭介。高校二年の17歳。彼女無し。勉強はあまり得意じゃないし、スポーツだって苦手だし。

おいおい、これじゃ僕、良い所が一つも無いじゃないか。

「スポーツなんてのはなあ。やる気次第で、ある程度出来るもんなんだよ。お前にはそのやる気つてもんが、欠片もない。俺を見てみる。ついこの間まで、俺はお前と同一人物だったのに、ちよつとやる気を出せばどうだ。今じゃすっかり、学校の人気者だもんな」

鏡の向こうの《あいつ》ときたら、ビール片手に上機嫌で、そう言い切る。スポーツ大会でやった野球の試合で、ちよつと活躍したっただけだろう。

女の子にキヤーカー言われたくらい、何だっただよ。偉そうに。

「どうせ僕は、運動音痴さ。お前と違って三振ばかりだし、エラーの数だつて一番だよ。女の子からだつて、笑われたしね。だけど、」

「おい、お前。酔っ払ってるのか？ 何、訳判んないこと言ってるんだよ」

「どうせ、僕はお酒も弱いよ。ほつとけ、馬鹿野郎!!」

僕はそう怒鳴って、持っていたビールの缶を、鏡に向かって投げ付けた。鏡に当たった缶は、虚しい音を響かせながら、こちらに向かって跳ね返ってくる。僕はその後も、ブツブツと《あいつ》に悪態を吐いていたらしい。

そして、いつの間にか、酔っ払ったまま眠りに落ちていた。

「だけど、僕だつてお前の所為で、鏡のある所には行かないように苦勞してるんだぞ。馬鹿野郎!!」

「つたく、この虎が。誰の所為で、真面目に学校へ行つてると思ってたんだ。おい、きちんと布団に入れよ。風邪引くぞ」



ああ、頭が割れそう。ガンガンと、頭の中で鐘を撞かれてる感じがする。胸もムカムカして、気持ち悪い。いったい僕は、どうしちゃったんだろう。

昨日、何か悪い物でも食べたっけ？

何とか重い頭を上げると、こんな僕とは裏腹に晴れ晴れとした顔の《あいつ》と、目が合った。

「どうした、青い顔して。もしかしてお前、二日酔いなのか？ つとに、だらしな奴だなあ。さつさと顔、洗って来いよ」

二日酔い!! そうか。夕べは、《あいつ》とビールを飲んでたんだっけ。途中までは覚えてただけだな。いつ寝ちゃったんだろう？

歩く度に響く頭と、怠い身体を引きずるようにして、何とか階下の洗面所まで行く事にする。

「圭介、起きたの？ 嫌だ、お酒臭い。家の中だけならあんまり煩く言わなけれど、夜中に一人で大騒ぎするのだけは、止めなさいよね」

途中、台所で擦れ違った母さんに、露骨に顔を顰められた。

そんなに臭うかな？  
腕の辺りの臭いを嗅いでみたけど、自分ではよく判らない。

「怒られてやんの」  
洗面所の鏡の前に立つと、先回りしていたらしい《あいつ》が、楽しそうに笑いながら待っていた。

「なんだよ。そんな事言うために、ワザワザ着いてきたのか？」

「そんな訳無いだろ。お前が鏡を覗く度に、俺も引き付けられるんだよ。だから、行きたくもない学校にだつて、行ってるんだ」

「そうか!! どうりで僕が鏡の前に行つた時、いつもタイミング良く《あいつ》が居たんだ。鏡なんだから当たり前なんだけどさ。」

今までは、もし《あいつ》が居なかつたらつて、すごい不安だった。だから

ら、なるべく鏡の前には近付かないようにしてただけ。僕から離れられないなら、そんなにビクビクしなくても大丈夫かも。鏡の前でふざけられるのも困るけど。って、あれ？

「確か、前に飲みに行つてなかったっけ？もしかして、鏡に映らないように、努力してたの？」

《あいつ》も、僕のように鏡を恐れてコソコソしてたんだと思うと、何だか少し可笑しかった。

「そんなことする訳ないだろう。一つの鏡で繋がってれば、離れてたつて大丈夫なんだよ。あの時はお前、部屋に居ただろう。壁に掛けてある鏡を持つて出掛けた。お前は気付いてなかったけどな」

「あ、あんなもん持つて、遊びに行ったの？わざわざ？」

「仕方ないだろう!!」

《あいつ》は顔を真っ赤にして怒鳴り返してきたけど、何だかもう、前よりも怖くなくなっていた。あんな大きな鏡を持つてまで、遊びに行きたいなんてさ。本当、変な奴だよな。

「今、頭の中でバカにした相手が、お前自身の事だつて、判つてるよな？」

そう言つて、《あいつ》は赤い顔のまま、精一杯の虚勢を張る。

ふん。いくら僕だつて、そんな馬鹿な真似しないよ。

「そこで、提案があるんだ。俺達が、別々に生活する為に」

「僕、嫌だよ。あんな大きな鏡、持つて歩くの」

《あいつ》の提案を、僕は、間髪容れずに否定する。

冗談じゃないよ。そんなの恥ずかしくて、外を歩けないじゃないか。

「誰もそんな事、言つてないだろう!! もっと、小さな鏡があるんだよ。この間、机の中で見付けたんだ。あれならお前だつて、そんな邪魔じゃないだろう？別行動になれば、俺が学校で活躍する事も無いし、お前のコンプレックスを刺激しなくて済む。なつ、名案だろ」

「何だよ、それ!!」

名案だと言う《あいつ》の揶揄いの言葉に、今度は僕の方が、顔を赤くして狼狽える。

失敗した!! 夕べ酔っ払つて、何かまずい事言っちゃったんだ、きつと。

でも本当だよ。鏡の向こうとこつちとじや、学校の雰囲気だつて、まるで違つてきてる。こつちは、何処にでも居る冴えない高校生。なのに、もう一方では、一日にしてスポーツ万能な学校の人気者だもん。本当、違い過ぎだよ。



「いいな。この鏡以外、絶対に見るなよ。もし、何処かの鏡に映つてたら、この鏡を覗くか、10分以内にその場から離れるんだ。一對の鏡で、俺達が繋がつてる状況を作り出せなければ、俺はこの世界から消滅する。いくら引き付けられるつて言つても、遠くに居たら無理だから。俺が消えたら、お前は一生吸血鬼だ。そうなりたく無かつたら、気を付けろよ」

本当か冗談かよく判らないけど、《あいつ》は真剣な顔でそう言つて、僕に机の抽斗にあつた小さな鏡を持ち歩かせた。

だいたい、アニメのヒロインじゃあるまいし、なんで男の僕が、こんな鏡を持つて歩かなきゃいけないんだよ。

ポケットの上からそつと鏡に触れると、大きな溜め息を吐いた。

「圭介。何、呆けてるんだよ。授業、とつくに終つてるぜ」

「あつ、ごめん。ちよつと考え事してさ」

クラスメイトで親友の飯島柁憲が、心配そうな顔で僕の顔を覗き込みながら声を掛けてくる。慌てて、鞆を手に立ち上がった。

「最近、変だぞ。ポケットしてるかと思えば、コソコソとトイレに行つたりしてるしさ。何かあつたんなら、相談に乗るぞ。隣のクラスの宮沢が、原因は？」

ポケットしてるのはともかく、トイレでコソコソしてる原因に、何で妙子の名前が出て来るんだよ。《あいつ》が学校に来ないから、叱つてただけだ。「妙子なんか関係ないよ。あいつはただの幼馴染だつて、言つただろ」

「あたしが、どうかした？」

下駄箱で靴に履き替えてると、幼稚園からの幼馴染、宮沢妙子がニコニコ顔で立っていた。

たら、不機嫌そうな妙子と目が合った。

あいつ、まだ怒ってるのか？

「妙子が遅いんだろう。今帰ってきたのか？」

「放つといてよ。圭介だって、先刻までバイク乗り回してたじゃない。それも制服のまんまでなんて、補導されたって知らないからね。女の子なんか後ろに乗せてさ」

僕がバイクを乗り回してただって？ 免許だって持って無いのに。

乗ってみたい、って思った事くらいは、あるけどさ。

「人違いだよ、妙子。僕、枉憲と別れた後、すぐに帰って来たしさ」

「そうなの？ 何だ、そっか。買い物途中で、鏡越しにチラっと見ただけだったしな。似てた気がしたんだけど。何だ、人違いか。そうだよ。だって圭介、免許持って無いもんね」

「そ、人違い、人違い。こんな顔、何処にでもいるしさ」

妙子は、先刻までの不機嫌そうな顔から一転、ニコニコと上機嫌に笑っていた。

本当、女って不思議。こんなにコロコロと、表情が変わるもんなんだ。

それにしても、バイクだなんて、何考えてるんだよ。《あいつ》、人に鏡持たせて、好き放題やってるんだな。帰ってきたら、覚えてろよ。



僕は、鏡の前で《あいつ》を待った。だけど、待っても待っても、《あいつ》はなかなか帰って来ない。

いったい何処まで行つたんだよ。部屋の鏡は、10分以上見続けられないのに。でも、本当に消えちゃうのかな？ 少し試してみたい気がする。

そんな好奇心を弄びながら《あいつ》の帰りを待っていた僕は、とうとう待ちきれずに眠ってしまった。

「おい、起きろ。よだれ垂らして、呑気に寝てる場合じゃないんだ。おいっ  
てば!!」

「後5分」

「いや、圭介がさ。最近、何か変なんだよな」

「確かにそうかもね。圭介ってば、近寄りがなくなっちゃったもん。うちのクラスの女子とかも噂してたし」

《あいつ》の事だ!! 鏡の向こうの世界とズレてない妙子達には、向こうの僕とイメージがダブってるんだ。枉憲なんかは、毎日こっちの僕と顔突合せてるから、全然平気みたいだけど。これ以上妙子と話していると、枉憲に変に思われちゃうかな。

「そうか？ 確かに何かコソコソしてるのが目に付くけど、そんな近寄り」

「おい、妙子。せつかくクラスが変わったんだから、もう僕には近付かない事にしたんじゃないのか？」

僕は枉憲の言葉を遮るように、慌てて別の話題を持ち出した。

危ない、危ない。

「だって、圭介の顔なんか、もう見飽きちゃったもん。何よ。圭介がバイト探してるって言うから、良いバイト先教えてあげようと思つたのに。も知らない。圭介の馬鹿!!」

それだけ言うと、妙子はその場を逃げるように駆け出した。

ごめんな、妙子。

「馬鹿だな、圭介。何も邪険にすること無いだろう。宮沢の奴、お前のことが好きなんだぜ」

「何言ってるんだよ。僕と妙子はそんなんじゃないって言つた。だいたい、今度のクラス替えで別々になった途端、彼氏を作るから近付くな、って言つたのは、妙子の方なんだから」

「だからお前は馬鹿だつて言うんだ。本当、鈍感つてのは始末に悪いよな」

枉憲は、別れ際までずっと同じようなことを、僕に話し続けていた。良かった。先刻の妙子の言葉は、あんまり気にして無いみたいだ。

でも何で僕と妙子なんだよ。あいつは子供の頃から隣に住んで、僕に対してあれこれ世話焼いてきたけど。あいつは一人っ子だから、僕はずっと、弟扱いだったんだぞ。

「あら、圭介。帰つてたの？ 随分早かったのね」

僕の部屋の向こう側には、妙子の部屋の窓があるんだ。風呂上りに涼んで

「寝惚けてないで、ちゃんと起きろって」

イライラとした《あいつ》の声に、僕は洪々身体を起こす事にする。

「ああ、お前なあ!! 僕、ずっと待ってたんだぞ!!」

いつの間に眠つちやっただらう。

目を擦りながら起き上がると、漸く頭が働き出して来る。

僕、《あいつ》が帰ってくるのを、ずっと待ってたんだ。一言言つてやらなきゃ、気が済まないよ。

「俺も、ずっとお前を呼んでたんだぞ。お前、一回も鏡、見なかっただろ。何の為に持たせてると思つてんだ。俺じゃ、お前を鏡の前に引き付けるなんて、無理なんだぞ」

その手があったんだ。制服のズボンに入れっ放しで、すっかり忘れてた。

「そんな事どうだつて良いよ。今日、学校サボつてバイク乗り回してたんだつて? それも、女の子を後ろに乗せてさ」

「何でそんな事知つてんだ? もしかして、お前もサボりか」

「そんな訳、無いだろう!! 夕方、妙子が見たつて言うからさ」

「妙子って誰だ? あつ、隣の煩い姉ちゃんか」

一瞬、《あいつ》は考え込むような素振りを見せたが、すぐに妙子が誰なのか思い出したらしい。それにしても、妙子って、そんなに煩いかな?

「後ろに乗せてた女の子って、今、そこに居る子なの、もしかして?」

《あいつ》と言ひ争つて気が付かなかつたけど、《あいつ》の後ろには大人しそうな女の子が立っていた。

あの子が学校サボつて《あいつ》と一緒にバイク乗り回してたなんて、全然そんな感じには見えないけど。でも、こんな時間に男の家にまで着いて来るんだから、やっぱりそういう感じの子なのかな。

「ああ、実はその事で、お前に頼みがあるんだ。バイクに乗ってたら、こいつを引つ掛けちまつてさ」

「引つ掛けたつて!! 交通事故? で、病院は? 容態はどうなの?」

バイクの事故だなんて、どうしたら良いんだらう。僕、免許なんて持つて無いから、やっぱり少年院行きだよ。いくら僕じゃないうつて言つたつて、

こんな信じてもらえないし。

僕は見る見る真つ青になっていくのが、自分でも判つた。

「おい、勘違いするなよ。確かに病院には連れてつたけど。多分、妙子が見たのつては、そんな事だ。ついでに言うつと、こいつの怪我もたいした事はない。ほんのちよつと擦つただけだから、絆創膏一枚貼るだけで充分だったんだよ。その割には、こんな時間になつちまっただけだな」

そう言つて《あいつ》は女の子を振り返つた。彼女は小さく微笑むと、絆創膏の貼られた腕を、僕に見せる。

なんだ、そうか。僕はまた、よっぽど酷いのかと思つたよ。

「で、僕に頼み事つて何さ。その子と関係があるんだよね?」

「いい加減その鈍感、どうにかならないのか? 何で気付かないんだよ。これは鏡なんだぞ」

えつ? そう言えば、映つてない。じゃない。映つてるのに、こつちに彼女が居ないんだ。僕は、自分の部屋を見回してしまつた。やっぱり、いない。

「漸く理解したか」

「もしかしてその子、幽霊かなんかなの?」

「馬鹿か、お前は!!」

ホトホト呆果てたような顔で、《あいつ》は僕に怒鳴り散らす。嫌だな。ただの冗談だよ。

「で、いったいどうしたつてのさ?」

「行き成り真面目になんなよ。気持ち悪い奴だな。だから言つただらう。バイクで引つ掛けたつて。病院へ連れて行つたら、こいつの姿が鏡に映らない。

俺も焦つたよ。事情を聞こうにも、自分の事すら覚えてない、つて言うんだからな」

「記憶喪失つてやつ。もしかして?」

「ああ、俺がバイクで引つ掛けた所為で、鏡がズレたんだらう。それが原因で、記憶が無くなつたんだ、きつと」

そんな事つて、あり得るのかな? まあ、僕達だつてズレてるんだから、あり得るんだらうけど。でも、僕は記憶喪失になつて、ならなかつたぞ。でも」

「記憶喪失の件か? お前と違つて、彼女は繊細なんだらうさ」

《あいつ》は、僕の表情を読んだかのように、ニヤニヤと笑って言った。どうせ僕は、ショックを受ける所か、暫くズレてる事にすら気が付かなかつたよ。

「誰もそんなこと、言っていないだろう。女の子なんでもん。鏡を見ることくらいあるんじゃないかって。引き付けられたりしないのかな？」

「そこなんだけどな。どうやらそれ、俺の勘違いだったみたいだ。彼女、身元が判るような物は、何一つ持って無いってのに、唯一鏡だけは持ってた。きつとそっちの彼女も、同じ鏡を持ってる筈だ」

「だから、どうしたって言うのさ」

「きちんと、話は最後まで聞けって。だから、お互いが1つの鏡を離さず持つていれば、他の鏡を見ても引き付けられたりしないし、10分経っても消えたりしないって事だよ」

妙子も買物してて《あいつ》を見掛けたって言ってたもんね。それなら僕だって、気付かない内に何処かに映っててもおかしくない。10分以上だつて、映ってたかも知れない。

「でも、10分経つても消えないのかも知れないじゃん」

「それは絶対だ。俺は危うく、消え掛かった事があるんだからな。正確な時間には判らないが、10分は耐えてたと思う。だからそれ位までなら持つ」

お前の所為だぞって目で、《あいつ》が僕を睨む。

そんなの、僕の所為じゃないよ。多分その時はまだ、ズレてるつて事すら気付いてなかったんだ。でも、本当に消えちゃうのか。知らない内に吸血鬼になる所だったなんて、考えただけでも怖い。

「そこで、だ。お前に頼みがある。俺はそっちの世界には行けないからな。そっちの世界のこいつを、探してやってくれないか？」

「ええ、僕があ？」

「私の所為で、ご迷惑掛けてごめん下さい。でも、どうかお願いします」

何で僕が、そんな事しなくちゃいけないんだよ。そう言つて《あいつ》に抗議しようとした時、彼女が初めて口を利いた。恐縮して本当に申し訳なきようにしてると彼女を見てると、何だか可哀想になってきちゃってさ。

「いやあ、そんなのたいした事ないから、気にしないでよ。すぐに見付けて

あげるからね」

そう言つて、つい安請け合ひしちやつたんだよね。

「ふん。ニヤけた顔しやがって」

そう言つと、《あいつ》はそっぽを向いた。

あれ、もしかして拗ねてる？

《あいつ》の顔が、一瞬赤くなつたように見えたけど、「見付かったら、すぐに鏡を見るよな。こいつはそれまで、ずっと俺の傍にいるから」

そう言つた時には、いつもの不敵な笑顔に戻っていた。

なんだか、とんでもない事を引き受けちゃつた。人一人見付けるなんて、言う程楽じゃないよ。何の手掛かりも無いんだからね。



初めから諦めていたのに、なんと次の日には手掛かりが掴めたのだ。それも隣のクラスだったなんて、灯台下暗しも良い所だ。

次の日学校へ行くと、隣のクラスの男子達がやけに騒いでいた。

「あれ？ 何騒いでんのさ」

一年の頃のクラスメイトを見付けて、声を掛ける。

「うわっ!! なんだ、杉田かよ。脅かすなって。お前、知らないのか？ これだよ、これ。うちのクラスの美咲ちゃんが、ダントツ1位。2位以下ブツチギリのトップだぜ。やっぱ、みんなのアイドルは違うよなあ」

そう言つて『美人コンテスト ベスト50』と書いた紙を、僕に手渡した。コンテストなんて、いつの間にかやってたんだよ。あつ、妙子も10位以内に入つてんじゃない。あいつも人気あるんだな。

「早坂美咲って、どんな子だっけ？」

1位になっている女子の名前には、まるで見覚えがなかった。

「うわあ、何で罰当たりな奴なんだよ、お前は。あんな可愛い子見た事ないなんて。あつ、ほら、向こうから来る。あれがそうだよ。じゃあな、杉田。俺、前へ行つて挨拶してくるから。その紙、お前にやるよ」

早口でそう言うと、人だかりを掻き分けるようにして行ってしまった。そんなに可愛い子、隣のクラスになんていたっけ？

人垣の隙間から、漸く噂の美咲ちゃんを発見する。沢山の取り巻きに囲まれてにっこり微笑んでるのは、昨日《あいつ》の後ろで頭を下げていた、あの記憶喪失の彼女だった。

「こんな偶然って、ありなのか？」

「おい、圭介。何ボケツと、突っ立ってんだよ。もう、チャイム鳴るぞ」

あまりの驚きに愕然とした僕は、柩憲に声を掛けられて我に返る。いつの間にかみんな教室に入っていて、僕一人だけが廊下に立っていた。

「おつ、美人コンテストの結果発表じゃん。どれ、見せてみるって。うげつ。1位は早坂美咲かよ。皆、見る目ないなあ」

柩憲は、僕が持っていた紙を奪い取ると、声を上げる。

あれ？ 柩憲の反応は、隣のクラスの連中と違うんだな。

「何だよ、柩憲。知ってるのか？」

「早坂って、先月隣のクラスに来た転校生だろ？ 美人で頭が良くて運動神経抜群でつてやつ。おまけにすごい金持ちのお嬢様で、我仮し放題つて噂の。女子からは一部の取り巻きを除いて、随分と反感を買ってるって話だぜ。男子は未だにチャホヤしてるみたいだけだな。まさかと思うけど、圭介も早坂のファンなのか？」

「ううん。僕は今日、初めて見たから」

そんな噂のある子が、昨日の彼女だなんて、僕はとても信じられなかった。

たった一晩話をしたただけだけど、全然そんな感じじゃないよ。確かに見た目は彼女そのものに見えるけど、取り巻きを連れてにっこり微笑んでる美人、なんてタイプじゃ無い。

「相変わらずトロイなあ。そんな事じゃ、明日のバスケの試合も、忘れてるだろ？」

「試合って何の？ スポーツ大会、この間終わったばかりじゃないか」

「原因は、早坂だよ。女子のスポーツ大会も、今年は野球だったろ。野球なんて男子の種目だって息巻いてさ。テニスかバスケをやらせろって先生に掛け合っただ。生徒全員が参加できるほど、テニスコートも時間もないから

バスケに決まったって、この間言ったじゃん。体育教師も早坂美咲のファンなんだぜ」

そう言えば、そんな事言って怒ってたっけ、柩憲。

バスケの試合かあ。二度も《あいつ》にコンプレックスを刺激されちゃ、たまらないよな。

僕は憂鬱になって、大きな溜め息を吐いた。



「彼女が見付かった!! おい、本当に見付かったのか？」

放課後、僕は急いで家に帰った。

学校で見掛けた早坂美咲の事を、早く《あいつ》に話したかったつてもある。それがなくても、今日は早く帰る予定だったんだ。爺ちゃんが入院して、父さんも母さんも田舎に行っちゃってさ。留守番を言い付かってるんだよね。だけど、僕にとつての目下の心配事は、夕飯の方だよ。母さん、用意しておいてくれるかなあ。

ブツブツ言いながら家に帰った僕は、部屋に入るなり《あいつ》に彼女の事を話した。

「嘘なんか吐くもんか。彼女の名前は早坂美咲って言って、妙子と同じクラスに先月転校して来たんだ。家は、丘の上にある白い洋館だつてさ」

「早……坂……美咲？ ……白い洋館？ 聞いた事がある気がします」

鏡の向こうの美咲ちゃんは、頭を抱えるようにして、何かを思い出そうとしていた。《あいつ》は、何も言わずに見守っている。

鏡の向こうの美咲ちゃんと、学校で見た本物の早坂美咲が同一人物だなんて、僕にはどうしても思えないんだよね。まあ、僕と《あいつ》だってこんなに性格が違うけどさ。雰囲気まで全然違うなんてこと、あるのかな？

一応確かめる為に、妙子のクラスを覗いてみたんだ。で、見ちゃったんだよね、僕。傍に居た取り巻き連中は、教室の窓に薄っすらと映ってるのに、早坂美咲は影すら映ってなかった。誰も気付いてなかったみたいだけさ。ただ、僕がそれに気付いた事を知ると、真っ青になって教室から飛び出して



行っちゃった。昼休みに彼女から呼び出された時には、生きた心地がしなかったな。だって、教室に残ってた男子達が、すっごい睨んでるんだもん。」

「杉田君だったわよね。貴方、先刻見た事、忘れてくれないかしら？」

「えっ、先刻見た事って何？」

行き成り彼女から呼び出されて、近くで見るとやっぱ美人だよな、なんてボケっと眺めてたから、僕は一瞬、何を聞かれているのか判らなかつた。

「もお、鈍いわね。窓に映らなかつたでしょ、私」

「あつ、その事か」

つい、拍子抜けしたような声になってしまった。その声が不満だったのか、彼女の顔が不機嫌そうに歪むのを、僕は見逃してしまふ。

目の前の彼女より、家で待っている美咲ちゃんの事を考えていたんだ。

美咲ちゃんの事、彼女に話した方が良いか。でも、行き成りこんな事を話して、ショックで彼女まで記憶喪失になっちゃったら困るよね。

「その事かつて、随分な態度ね。貴方、私の事が心配じゃないの？ 行き成り鏡に映らなくなつて、私がどれだけ心を痛めているか。心配なら、他に言う事があるでしょう？」

僕がどうしようかと迷っていると、彼女は急に怒り出す。

「これだから、我侭なお嬢さんって、苦手なんだよ。」

「まあ、そんな事はどうでも良いわ。忘れてくれるなら、私の彼女にしてあげる。貴方、この間のスポーツ大会で、一人で点を取っていたあの杉田君よね？ 私、貴方の事を気に入ったの。貴方にとつても、良い条件でしょう」

彼女はそう言うのと、僕に向かってにっこり微笑んで見せた。

《あいつ》の事だ。妙子と一緒に、《あいつ》と僕の印象がタブってるんだ。僕はウンザリして、大きく溜め息を吐く。どうせ《あいつ》の方が目立つよ。

「彼氏になんて、してくれなくても良いよ。忘れるも何も、初めから脅すつもりで来た訳じゃ無いしよ。僕は誰にも言わないよ」

「それ、どういう意味？ 貴方、確か宮沢さんと付き合っていたのよね。私よりも、あの子の方が良いって言うの？ いったい私の何処が、あの子より劣るって言うのよ」

「別にそんな事言っていないよ。だいたい僕は別に、妙子と付き合ってる訳じ

やないしよ」

「嘘!! じゃあ、私の何処が不満だつて言うの？ さあ、早く言いなさい」  
彼女が命令口調で詰め寄って来る。僕はそれを、ボケっと眺めていた。

「いったい何処から、こんなに話がズレたんだっけ？ それにしても、美人が怒ると迫力あるなあ。妙子が怒る方が、もっと怖いけど。」

「付き合うとか不満とか、全然関係ない。僕が言いたいの、鏡の事だよ。小さな鏡、持つてるよね。君を吸血鬼にしない為にも、大切な事なんだ」

「私が吸血鬼ですって？ 酷い!! じゃあ、宮沢さんは何だつて言うの？」  
彼女がそう言つて、ヒステリックに叫んだ。

もしかして、本当に吸血鬼になったら、こんな感じになるのかな？

「そこへ、タイミングが良いのか悪いのか、妙子が現れた。」

「どうしてここに宮沢さんが来るのよ。判つたわ。貴方達、そうやって私を馬鹿にしてるのね。鏡に映らない私を見て、2人して楽しんでるんでしょ。酷いわ。明日の試合、覚えてなさい。私、宮沢さんには絶対に負けないから」

彼女はキツと妙子を睨むと、言いたい事だけ言つて、その場を走り去る。僕は慌てて、彼女の背中に向かって叫んでいた。

「その鏡、絶対に離さないで持つてて欲しいんだ。頼んだからね!!」

「ねえ、圭介。鏡がどうとかがつて、何の話？ あたし、早坂さんに何かした？」  
「妙子には関係無い事だよ。巻き添え食わしちゃつて、ごめんな」

「何よ、その言い方!! 圭介が早坂さんに呼び出されたつて、飯島君が心配してたから、見に来てあげたのに!! ……最近の圭介、変だよ。何考えてるか、ちっとも判んない。以前までの圭介は、もっと優しくつたのに。今の圭介なんて、大嫌い!!」

そう叫んで、妙子も駆け出して行く。僕はどうする事も出来ずに、その場に立ち尽くしていた。

泣かせちゃつたかな？ 本当に泣きたいのは、僕の方なのにさ。きちんと事情を話そうにも、鏡がズレてるなんて、とても言える訳がない。

「ごめんな、妙子。」

「ごめんなさい。やっぱ、何も思い出せないわ」

美咲ちゃんの声に、ハッと我に返った。

びつくりした。僕、口に出して言っちゃったのかと思った。

「無理しなくても良い。一応、身元もはっきりしたしな。後はどうやって、元に戻すかだけだ。楽勝だよ」

「元に戻すなんて出来るの？ 僕達だって、ズレる一方なのにさ」

「そんな事、これから考えるんだよ。お前は良いから、黙ってる!!」

《あいつ》が怒鳴って、ハッと気付く。美咲ちゃんが僕達の会話を、聞いてたんだ。《あいつ》の背後に視線を向けたら、不安そうな瞳の美咲ちゃんと、目が合ってしまった。

「ごめんね、美咲ちゃん。安心して大丈夫だよ。きつと元に戻るから」

「ありがとうございます。私、食事の支度をしてきますね。そちらの圭介さんには食べさせてあげられないけど、お料理得意なんですよ」

小さな微笑だけ残して、美咲ちゃんは部屋を出て行った。

傷付けちゃったかな？ 僕の場合は初めから《あいつ》が傍にいたけど、美咲ちゃんは自分が誰だかも判らなくて、一人ぼっちなんだもんな。可哀想な事しちゃった。

「ふん、後悔してますよって顔だな。本当、お前もお人好しだよ。俺なんか、身元が判ったお陰で、早々にあの鬱陶しいお荷物から解放されると思って、清々してるのにさ」

「お前がそんなに冷たいから、僕は妙子に嫌われたんだぞ!! あっ」  
やばっ。僕、何言ってるんだろ。

慌てて口を塞いだけど、もう遅かった。《あいつ》のニヤニヤ笑いが、鏡の向こうに貼り付いていた。

「お前、隣の姉ちゃんがタイプなのか？ 悪趣味だな」

「放つといてくれよ。お前には関係ないだろう」

「ああ、確かに俺には関係ない。さて、俺も下へ行って、美咲の飯でも食って来るとするか。お嬢さん育ちが作った料理じゃ、あんまり期待は出来ないけどな。お前はほか弁でも買って食えよ」

《あいつ》はそう言い残して、部屋を出て行った。

ふう。大きく息を吐き出すと、僕はゴロンとベッドに横になる。

《あいつ》もなんだかんだ言って、美咲ちゃんのことを心配なんじゃないか。

その夜は、美咲ちゃんの手料理を着に遅くまで飲み明かした。もちろん美咲ちゃんの手料理を食べるのは《あいつ》で、僕はほか弁と冷蔵庫のあり合わせだけだっただけね。

「圭介さん達って、本当に仲が良いんですね」

ほんのり頬をピンク色に染めて、美咲ちゃんが言う。

お酒の所為かな。僕にも少し、打ち解けてくれた感じだ。夕べ話した時には、《あいつ》に比べて、僕には遠慮がちだったもんなね。

「冗談じゃないぞ、美咲。誰と誰が仲が良いんだって？」

「そうだよ、美咲ちゃん。こういうのは、仲が悪いって言うんだよ」

「そうですか？ とても気が合っているように見えますよ」

美咲ちゃんが心底楽しそうに笑う。本当の早坂美咲の微笑なんかとは比べられない程、それは可愛かった。

「こんな奴と、気なんか合いたくない。こいつの趣味は、隣の妙子なんだぞ」

「そんな事、今は関係ないだろう。お前だって、なんだかんだ言っても、美咲ちゃんに気があるくせに」

「いつ、そんな事言ったよ。俺は美咲の事なんか、なんとも思っちゃ」

僕がそう言い返すと、《あいつ》は顔を真っ赤にして狼狽える。

そうかなって思って、鎌を掛けたつもりなんだけど、こども簡単に引つ掛かってくれるなんてね。何だか《あいつ》が可愛く見えちゃうよ。

《あいつ》の言葉に悲しそうな顔をする美咲ちゃんを見て、《あいつ》は真っ赤な顔を更に赤くすると、そっぽを向いたままぶつきらぼうに言った。

「そうだよ。俺は美咲に気がある。その何が悪い。おい、酒がないぞ、酒が!! ほら、さっさと注げ」

大声でそう言うと、まるで照れ隠しのように、美咲ちゃんの目の前に空の

コップを差し出す。

横柄な奴だな、ホントに。

「誰も悪いなんて言っていないよ。美咲ちゃんもそんな奴、嫌だったら放つておいて良いんだからね」

僕の言葉に、美咲ちゃんは首を横に振って答えると、瞳に涙を溜めながら、

《あいつ》にお酒を注いでいた。

「おい、お前。一応俺とお前は同一人物なんぞぞ。そんな事言つて良いのか？美咲も、こんな事でいちいち泣くな」

「私。身元が判つて、元の自分が判るのに。元に戻れるのに。今でも戻りたいて思ふのに。なのに、なのに。元に戻つて、圭介さん達の事を忘れちゃうのが、怖い。心の何処かで、元に戻りたくないと思つてるの。私、どうしたら良いのか、判らない」

「美咲ちゃん」

「つたく、何を言ひ出すのかと思つたら。そんなの簡単じゃないか。元に戻るのが一番に決まつてるだろ」

泣き出している美咲ちゃんを、どう言つて慰めて良いか判らずに困つていと、《あいつ》は呆れた声を出した。

「忘れちゃつても、良いの？」

「元に戻つた後、俺やこいつの事を忘れてたとしても。思ひ出つてのは、心の何処かにきつと残つてる。何でも無い時に不意に思ひ出して、それで懐かしい気持ちになつてくれるだけで、俺もこいつも満足だ。だから、安心して元に戻れ」

「あ……りがと……う。そう言つてくれなかつたら、私、元に戻りたくないつて言つてしまふそつだつた。元に戻つても、きつと圭介さん達の事、思ひ出して見せませす」

美咲ちゃんは涙を拭くと、力強く頷く。その顔には、微笑が浮かんで来た。

僕も、鏡のズレが直つた時には、《あいつ》の事を忘れちゃうのかな？

そう思うと、何だか悲しい気分になつてくる。こんな事なら、昏間の早坂美咲の申し出、断るんじや無かつたかな。早坂美咲の彼氏になつたら、美咲ちゃんが元に戻つても、《あいつ》といつても逢えるようになる。でも、早坂美咲が気に入つたのは僕じゃなくて、スポーツ大会で活躍した人気者の《あいつ》なんだもん。鏡の向こうでは良いかも知れないけど、僕が相手じゃ、きつとすぐに振られちゃうよね。

「おい、そつちで何イジケてんだよ。もう酔つ払つてるのか？」

酔つてなんかいないさ。今度こそ見てるよ。明日のバスケの試合。絶対に

勝つてやる。僕は補欠だけど、何とか試合にだつて、出てみせるんだからな。  
「あちらの圭介さん。眠つちやつたみたいですね。風邪、引かないかしら？」  
「放つとけ。馬鹿は風邪引かないつて言うだろ。酒で身体が温まつてるし、大丈夫だよ」



翌日は一日授業を潰して、全校生徒によるバスケットの試合が行われた。白熱した戦いを制しているのは、まだクラス内の統制が取れていない一年生や、受験勉強が忙しくて体育の授業をサボりがちな三年生を軽く抑え込んだ、二年生チームばかり。僕のクラスは、証憲率いるバスケ部員を中心に構成したチームのみが残つていた。僕はそのチームの補欠選手。

夕べは酔つた勢いで試合に出てみせるなんて息巻いてみたけど、ホント、補欠で良かったよ。二日酔いで怠い身体を何とか引きずつて登校したのは良いけど、ベンチに座つて試合を見てるだけで精一杯だったからね。

「圭介、女子の応援に行かないのか？」

一試合が終わり、次の試合までの空き時間を、二階の観客席で横になつて過ごしていると、頭上から証憲に声を掛けられた。

証憲の奴、ずつと試合に出つ放しなのに、何てタフなんだろう。

「女子の応援つて、どうせうちのクラス、もう残つて無いよ。証憲だつて疲れてるんだから、次の決勝戦まで少し休んでた方が良くない？」

「今、女子の決勝戦中。今年は優勝も準優勝も、隣のクラスで決まりだな。

だけど、宮沢が早坂のチームに一方的にやられてるらしい。圭介が昨日、宮沢と何で喧嘩したのは知らないけど、幼馴染として応援に行つてやれよ」

妙子が、早坂美咲に一方的にやられてる？

僕は昨日の早坂美咲の最後の言葉を思ひ出して、パツと起き上がった。

『明日の試合、覚えてなさい。私、宮沢さんには絶対に負けないから』

僕の所為で、妙子が苦しんでるのか？

観客席から下を覗くと、妙子達の試合が目に入る。点差はそんなに開いてないものの、妙子一人がマークされているのは明らかだった。

「下へ行つて応援してやろうぜ。もうあんまり時間も無いけど」

「うん、そうだね。……あつ、悪いけど柗憲、ちよつと先に行つて。僕もすぐに行くから」

「……? 判つた。先に行つてる」

立ち上がりかけた僕が再び座り込むのを見て、柗憲は怪訝そうな顔で頷いた後、何も聞かずに立ち去つてくれた。

柗憲が階段を降りるのを確認してから、急いで近くのトイレに駆け込む。個室の扉を勢い良く閉めると、ジャージのポケットから鏡を取り出した。

柗憲と一緒に妙子の応援に行こうと立ち上がった時、《あいつ》との接点であるこの鏡が、急に熱くなり出したんだ。そんな事、今まで一度もなかったのに。もしかして、《あいつ》に何かあつたのかな?

それが気になつて、柗憲の誘いを後回しにした。個室の中で一人になると、急いで鏡を開く。鏡の中では、《あいつ》が顔色を変えて、焦りまくつていた。

「何度呼ばせれば、気が付くんだよ。どんなに他の鏡を見たつて、俺にはお前を引き寄せられないんだから、少しはこの鏡を気に掛ける」

「どうしたんだよ。そんな血相変えて。何かあつたのか?」

「何かあつたなんて、そんなのんびりしてる場合じゃない!! 美咲が危ないんだ」

余裕のない声で、《あいつ》が怒鳴る。その向こう側で、美咲ちゃんが真っ青な顔で苦しんでいた。横たわる姿が、陽炎みたいに揺れていて、今にも消えてしまふように見える。いつたい、何かあつたんだ?

「どうしたんだよ、あれ。美咲ちゃん、大丈夫?」

僕の声は届いていないのか、美咲ちゃんからは何の反応も返つて来ない。代わりに、《あいつ》が答える。その声には、何も出来ない事への苛立ちが滲んでいた。

「大丈夫なもんか。俺も一度消え掛かつたからよく判る。すぐ苦しいんだ。早く何とかしなきゃ、美咲が消えちゃう!!」

「何とかつて、どうすりゃ良いのさ?」

何も思い付かない僕は、それだけ言うのが精一杯だった。僕がオロオロするのを見て、今度は《あいつ》が落ち着きを取り戻す。

「そうだ、鏡。本物の早坂美咲が持つてる鏡に何かあつたんだ、きつと。圭

介。お前、そいつを見てきてくれ。何か判つたら、すぐに俺に知らせろよ」

「判つた。美咲ちゃん、もう少しの辛抱だから、我慢してね」

その言葉を掛けると、そのままポケットに鏡を戻す。大慌てで個室から飛び出した後は、周りに目も繰れずに駆け出した。トイレの中には他にも誰か居たような気がしたけど、構っている暇はない。後で何か言われるかも知れないけど、今は美咲ちゃんの方が大切だ。

「圭介、何やつてたんだよ。もう女子の試合、終つちまつたぞ」

「ごめん。それより、早坂美咲が何処に居るか、知らない?」

コート付近まで駆け寄ると、傍で試合を応援していた生徒達の中に、柗憲の顔を見付けた。妙子の試合がどうなつたかも気になるけど、今はそれを聞いている時間も惜しい。キョロキョロと周りを見回しながら、柗憲に声を掛けた。僕が早坂美咲の名前を出すと、露骨に嫌な顔をする。

「圭介、見損なつたぞ。お前、宮沢の事は心配じゃないのか?」

「悪い、急いでるんだよ。妙子とは後で必ず仲直りするから、今は早坂美咲の居場所、知つてたら教えてくれないか」

僕は柗憲の肩越しに早坂美咲を探しながら、イライラとした口調で同じ質問を繰り返す。ごめんな、柗憲。今は本当に時間がないんだ。

柗憲は諦めた様子で、大きく息を吐き出すと、

「判つた。宮沢とは絶対に仲直りしろよ。約束したからな」

そう言つて念を押した後、早坂美咲の居場所を教えてくれた。

「早坂だったら、体育館の外へ出て行つた。終わつてすぐだし、急げば入り口の所で追いつけるんじゃないか」

「ありがとう、柗憲。恩に着るよ」

僕は柗憲に礼を言うと、体育館の外へ走り出した。柗憲の言う通り、早坂美咲はすぐに見付かった。早坂美咲の傍に、何故か妙子が一緒に立っている。

あれ? 取り巻きの連中が見当たらないなんて、珍しいな。

「あら、杉田君。わざわざ、私の優勝のお祝いを言いに来てくれたのかしら? 宮沢さんも、後少しだったのに、残念だったわよね」

早坂美咲はそう言つて、ふふふと笑つた。

そつか。妙子のチーム、負けちゃつたんだ。

妙子の顔を盗み見ると、あちこち掠り傷を作って、とても痛そうだった。「それより、鏡をどうしたの？ あれ程持つてるようになって、頼んだのに!!」

「何よ、昨日から鏡、鏡って」

「この位の小さな鏡だよ。いつも持つてるんだろ？」

美咲ちゃんが持つていた鏡を思い出しながら、両手で大きさを示す。

「ああ、あの鏡。あれなら捨てたわ。先刻落として、輝が入っちゃったのよ。お気に入りだったけれど、使えないなら仕方ないでしょう。だって、見た事もない風景が映っていて、気持ち悪かったんだから」

「捨てたあ？ 何処に!! 何処に捨てたんだよ!!」

そう言つて、僕は早坂美咲に掴み掛かる。

鏡に輝が入った位で捨てるなんて。だからあんなに、美咲ちゃんが苦しんでたんだ。対になる鏡を持たないまま他の鏡を10分以上見たら、美咲ちゃんには間違い無く消えちゃう。

「圭介。早坂さんに、何してるの!!」

早坂美咲に掴み掛かる僕を、慌てて妙子が止めに入る。

「痛いわね。何するのよ。鏡なら教室のごみ箱に捨てたわ。それが何だつて言うのよ、この野蛮人。きゃっ」

捨てられた場所を聞き出した僕は、掴んでいた手を離す。その拍子に、彼女は呆気なく倒れてしまった。妙子はどうして良いのか判らない様子で、間に立って僕達を見守っている。

「僕を野蛮人呼ばわりしたいなら、好きにだけすれば良いよ。僕だって、君が吸血鬼になつても、関係無いからね。だけど、あの美咲ちゃんが、君なんかの為に消えちゃうのは、絶対に許さない。《あいつ》の為に、僕が絶対にそんな事はさせないよ」

早坂美咲を指差して、そう宣言する。早坂美咲も妙子も、ポカんとした顔で僕を見返していたけれど、そんな事はまるで気にならなかった。ポケットから僕と《あいつ》を結ぶ鏡を取り出すと、早坂美咲に手渡す。

「これをずっと持つてて。妙子。悪いけど、この人を見てくれる？ 絶対にこの鏡、手から離させちゃ駄目だからね」

「わ、判った。判ったけど、圭介は？」

頼んだよ。その口の中で呟くと、僕は教室のある方向へ走り出した。「ちよつと、圭介。試合は？」

「どうだつて良いよ、そんなの。どうせ僕は補欠なんだから」

背中越しに聞こえてきた妙子の声に、僕は大声で言葉を返す。

そうさ。試合は僕じゃなくても出来るけど、美咲ちゃんを助けられるのは、僕しか居ないんだ。《あいつ》の為に、美咲ちゃんを消すなんて、絶対にさせないよ。僕の鏡の向こう側には、《あいつ》の傍に美咲ちゃんが居る。早坂美咲が僕の鏡を持つていてくれれば、そこに一對の鏡が存在する事になる。

《あいつ》の存在に初めて気付いた日。《あいつ》は言つてたんだ。壁掛けの鏡を持つて飲みに行つてたつて。あの時と同じ状況を、これで作れた筈よね。美咲ちゃんが消える心配はもうなくなった。けど、一刻も早く早坂美咲の鏡を見付けなくちゃダメだ。今度は《あいつ》の方が消えちゃう。そんな事になるなんて、冗談じゃない。



早坂美咲の教室に駆け込むと、後ろの壁際に置かれたごみ箱を抱え上げる。勢い良くごみ箱を逆様にして、中に入つていたごみを周囲に撒き散らした。

「おい、杉田じゃないか。何やってるんだ、お前？ ごみ箱なんか引つ繰り返してよ」

「なあ、鏡を知らないか？ ここに捨てられてた筈なんだ」

何度繰り返して探しても、美咲ちゃんの鏡が見付からない。早坂美咲が言つた教室のごみ箱つて、別のクラスだったのかな？

「鏡？ 知らないけど。ただ、昼休みに女子が、ごみ捨てには行つてたぜ」

「焼却炉か!! ありがとう」

お礼の言葉を残して、僕は廊下に飛び出した。

焼却炉なんて、すっかり忘れてたよ。

「おい、杉田。ごみ、片付けて行けよな!!」

「悪い。後、頼む!!」

背中越しに怒鳴られて、僕はそう叫び返した。

やばっ。片付けるのを忘れてた。後で先生には叱られそうだけど、それ所じゃないんだ。仕方ない。

階段を三段抜かしで駆け下りると、焼却炉のある新校舎裏へと急ぐ。焼却炉の前に立つ用務員のおじさんが、今にもごみを燃やそうとしていた。

「そのごみ、待ったあ!!」

「なんじやい、お前は。授業、サボリか?」

「そ……、そんな事より……、か……鏡、無かった?」

ずっと走り詰めだった所為で、息が上がって思うように喋れない。ゼイゼイと肩で息をしている僕に、用務員のおじさんは、それ以上サボリを咎めるのを止めてくれた。

「鏡なら、そこにあるわい。まったく近頃の若い者は、燃える物と燃えない物の区別もつかんのか」

そう言つて、横にあるバケツの蓋の上を、顎で示した。蓋の上には乾電池や使い終わったペンと一緒に、美咲ちゃんの鏡が置いてあつた。

あつたあ。僕は安堵の溜め息を吐く。つい気が緩んで、その場に座り込みそうになつたけど、一度座つたらもう立てそうにない気がして、何とかその場に踏ん張つた。

「おじさん、この鏡、貰つても良い?」

「誰かが一度捨てたもんじや。好きにすりゃ良い」

「ありがとう!!」

鏡を開くと、早坂美咲の言葉通り、全体に輝が入っている。鏡に映つた僕の部屋が歪んで映っていた。鏡の向こうは、この鏡を持っている美咲ちゃんが居る場所に、繋がつてるんだ。

鏡を閉じると、僕は用務員のおじさんにお礼を言つて、再び走り出す。

早坂美咲に僕の鏡を渡してから、どれ位時間が経つたんだろう。一箇所に10分以上立ち止まつてはいない筈だから、《あいつ》はまだ消えて無いよね。

それでも、自分で確かめるまでは安心できなくて、ついつい走るスピードが速くなる。

体育館に戻つてみると、先刻と同じ場所に、二人が心配そうな顔で立っていた。早坂美咲の手の中には、僕が渡した鏡が握られている。

「あたし、試合の状況が気になるから、もう行くね」

僕が戻つて来るのを確認すると、妙子がそう言つて、僕達から離れて行く。

僕が居なかつた間に、《あいつ》か早坂美咲に、全部聞いたのかな?

「氣を利かせてくれたのよ。はい。私とこの子を、元に戻してくれるんでしょう?」

早坂美咲が、開いた状態の鏡を僕に渡す。

やっぱり、僕と《あいつ》の事、全部知つちやつたんだ。それでも、何も

言わずに居てくれたんだな。

無言で妙子を見送つた後、僕は早坂美咲から鏡を受け取つた。

早坂美咲の顔にも、笑顔が浮かんでいた。でもそれは、我仮なお嬢さんの微笑なんかじゃ無く、僕達の知つている美咲ちゃん的笑顔に近かつた。《あいつ》がどんな説明をしたのか知らないけど、こうも変わるもんなのかな。

「おい。そんな所でポケつと見合いつてる場合か? 俺も危うく消え掛かつたんだからな。これで美咲の鏡が無かつたなんて、言わせないぞ」

「ああ、ごめん、ごめん。鏡はあつたよ。これをどうしたら良いの?」

用務員のおじさんに返して貰つた鏡を、バケツから取り出した。鏡の向こうの美咲ちゃんの顔色も、先刻よりは半分良くなつて居る。

僕の問い掛けに、二人の美咲ちゃんも、不安そうな視線を《あいつ》に向けていた。

二人同時に、この鏡を壁に投げ付ける。居る筈の無い俺にぶつかつた時、鏡を持っていたのが悪かつたんだよ。その鏡を粉々にして、同じ動作をすれば、きっと元に戻る。俺を信じろ」

それでもまだ不安そうにしている早坂美咲に、《あいつ》を信じきっている美咲ちゃんは強く頷いて見せた。

「やりましょう。大丈夫。記憶を失つた私に、圭介さん達はとても親切にしてくれたの。私は、そんな二人を信じます」

「判つたわ。私はどうせ、今までと変わらないんだし。でも、貴女は本当に、それで良いの?」

探るような視線を、美咲ちゃんに向ける。

さすがに同一人物だけあるのか、美咲ちゃんが《あいつ》に気がある事

を、簡単に見抜いていた。

美咲ちゃんは、持っていた鏡を、一度だけ強く握り締める。次に顔を上げた時には、もう気持ちが悪まっていた。

「はい。圭介さんが元に戻れて言ってくれたから。私はもう大丈夫」

「そう。それなら私も、用意は出来ているわ」

早坂美咲もすぐに決心すると、僕から鏡を受け取った。美咲ちゃんは泣きそうになるのを、一生懸命笑顔で隠そうとしている。《あいつ》はそんな美咲ちゃんを、何も言わずに見守っているだけだった。

「二人共、用意は出来てる？ 僕の合図で同時にだからね。じゃあ、いくよ」  
こんな役、本当は僕だってやりたく無いんだ。二人を引き裂くみたいでさ。

僕の掛け声で、二人同時に鏡を壁に叩き付ける。壁にぶつかる音と共に、目も開けていられない程の光が、辺りに広がった。ただの光の筈なのに、僕はその光に当たった瞬間、弾き飛ばされてしまった。思い切り地面に叩き付けられて、意識を失い掛けた時

「圭介さん。ありがとう。私、決して忘れないわ」

微かに美咲ちゃんの声が、聞こえた気がした。



あれからどれ位の時間が経ったのかは判らない。土の上に横たわっている事に気付いた時には、僕を弾き飛ばした光の渦は消えていた。

壁の傍には、美咲ちゃんの鏡の破片が散らばっている。先刻までの事が、夢ではない証拠だ。

何とか身体を起こすと、転がっていた僕の鏡に手が触れた。慌てて拾い上げると、特に壊れている様子はない。ただ、鏡の中に《あいつ》の姿は見当たらなかった。

「良かった」

ホッとして、安堵の溜息を吐く。

先刻の光で、僕と《あいつ》のズレも元に戻ってるんじゃないかって、少し心配した。鏡に映ってないなら、きつとまた何処かへ遊びに行ってるに決

まってるんだ。僕の意志なんて、いつもお構いなしでさ。でも、今日位は、《あいつ》の好きにしてやろう。

「私、元に戻ったの？」

早坂美咲も意識を取り戻したらしい。

僕は彼女が立ち上がるのに手を貸しながら、体育館の窓に映っている早坂美咲を指差した。窓に映っている彼女は、真正銘早坂美咲本人だった。

「大丈夫。君はきちんと元に戻ったよ」

「そう。良かったわ。私、危うく吸血鬼になる所だったのよね。一生鏡に映らないなんて、そんな化け物扱い、真つ平よ。あら、ごめんさい」

「いや、僕はこの生活、結構、気に入ってるからね」

「それ、嘘でしょう？ 鏡の向こうの貴方は、そんな風には言っただけじゃあ」

早坂美咲はそう言うのと、楽しそうに笑った。

先刻までの嫌味な態度が消えて、何処か美咲ちゃんに似ている。

《あいつ》がどう思ってるかなんて、知らないよ。だけど僕は」

最初は僕だって、あんな奴、大嫌いだっただけ。だけど、本当は僕だって。

「貴方に。鏡の向こうの貴方に言わせると、私、彼女に、鏡の向こうの私になりたかったんですって。何処が良いのかしらね。あんな大人しくて冴えない子」

「でも、美咲ちゃんは!!」

「言われなくても、判っているわ。全然冴えない子だったけど、でも、私と違って素直で一途で。誰からだって好かれる子だった」

「今からだって、遅くはないんじゃない。美咲ちゃんは、君の中に居るんだからさ。自信を持って大丈夫。僕が保証するよ」

「下手な慰めね。でも、そうね。頑張ってみようかな。いつか、本当に鏡の向こうの私になれるように」

「そうしたら、《あいつ》が喜ぶよ。もちろん僕だって嬉しいけどさ。もう一度、あの美咲ちゃんに逢いたいからね」

僕も頑張れば、少しは《あいつ》に近付く事が出来るのかな。本当は僕だって、《あいつ》のようになりたいんだ。

「無理しなくても良いわ。だって貴方には、宮沢さんが居るんだもの。先刻意地悪した事、怒ってないかしら。でも、鏡の向こうとこちらで、好きな人が違うなんて事あるのね。それで私は、どっちに迫れば良いの？」

そう言つて、早坂美咲はウィンクして見せた。僕は真つ赤になつてそつぽを向く。

僕と《あいつ》が元に戻つたら、僕はいつたいどっちを好きなんだろう。つて、何言つてんだ。別に僕は妙子の事、好きだつて認めた訳じゃ無いぞ。「宮沢さん、とても驚いていたわ。もちろん私だつて、驚いてはいたけど。でも、私は貴方と同じ境遇だった訳だし、すぐに状況は飲み込めたもの。まさか、駆け出した筈の貴方が、鏡に映つてるなんてね」

僕が居なかつた間に、どんな遣り取りがあつたんだろう？ 《あいつ》は、妙子に、何て説明したのかな。妙子の奴、何も言わずに行つちやつたけど。「何も言わなかつたわよ、宮沢さんには。ただ、貴方の事が好きなら、貴方を信じるつて、その一言だけ。格好良かった」

僕を信じろ、か。結局、僕はただ走り回つただけで、何の役にも立たなかつたのにな。

僕達がしんみり話していると、妙子が体育館から飛び出してきた。

「圭介!! 何してるの。飯島君達が大変なの。選手二人が怪我しちゃつて。今、飯島君が必死に頑張つてるんだよ」

「枉憲達が？ でも、補欠の僕には、何もしてやる事なんか。」

なかなか走り出さない僕に焦れてきたのか、行き成り妙子が怒鳴り出す。

「何、グズグズしてるのよ!! 圭介、補欠でしょう？ 補欠つてのは、メンバーの一人なのよ。皆が困つてる時に、後は任せろつて胸張つて言うのが、補欠つてもんでしよう!! 違ふの？ 圭介、男じゃなかつたの？」

「そうよ、杉田君。男らしく、友達を助けに行つたら？ あの人の為に、鏡の向こうの私を助けたみたいに。あの人のようになる為に、行きなさい」

《あいつ》のようになる為に、僕はずつと、《あいつ》のようになりたかつた。スポーツにしろ、バイクにしろ、《あいつ》が難なくやってきた事は、全部僕がやりたかつた事だ。なのに、僕はどうせ出来っこないつて、勝手にコンプレックス持つて、ただ拗ねていただけ。何一つ、自分からやつてみようつて

努力もしないで。

「ありがとう。一步でも《あいつ》に近付く為に、僕も頑張つてみる!! ほら妙子、行くぞ!!」

「何よ、行き成り。ちよつと、圭介つてば」

僕は早坂美咲にお礼を言つと、妙子を引つ張つて走り出した。

そうさ。元々、《あいつ》と僕は同一人物なんだ。《あいつ》に出来る事なら、僕にだつてやれない訳が無い。



体育館に入ると、決勝戦はもう終わりに差し掛かつていた。

僕以外に補欠がいない為に、怪我をした二人の選手は、足を引きずつたままや、左手でボールをドリブルしながら試合を続けている。そんな二人を力バリーしながら、枉憲が苦戦していた。

バスケット部員を中心に構成されたチームだけあつて、点差は殆ど無い。後2ゴールもすれば、こちらの勝ちが決まる。

「選手交代!! ゼッケン7番、入ります」

僕は審判の横に立つと、真つ直ぐに手を上げて、高らかにそう宣言した。交代の合図を示す笛が鳴ると、僕は足を引きずつていた友達のを叩いて、コートに入る。

「枉憲。パス回してくれ!! 絶対ゴール決めてやる」

相手チームにしつかりとマークされている枉憲は、思うように前へ出られないでいた。

枉憲の奴、次期部長つて言わてるのは、伊達じゃないよな。怪我人が出た中で、あいつ一人がゴールを決めてたようなもんだしさ。マークが固いのも、無理無いよ。

何度もパスを回しながらシュートを決めても、なかなか上手く決まらない。

「枉憲!!」

ゴール下でマークから逃れた枉憲にパスを回す。だけど、シュートするにはディフェンスが邪魔だ。あつと言つ間に枉憲の周りに壁が出来た。



静かな体育館の中に、ドリブルの音だけが響いている。

決心したかの様に、一度だけ強めにドリブルをすると、そのままシュートの構えを取る。足のバネで高く飛ぶと見せかけて、

「圭介!! シュートだ!!」

そう言つて、僕の方へとボールを投げる。柗憲からボールを受け取つた僕は、そのまま一気にジャンプ。ディフェンスが間に合わない隙を狙つて、シュートを決めた。

ネットを揺らす音と、高らかに鳴る笛の音が、僕の気持ちを高揚させる。やつた!! これで同点だ。

「どんだん攻めるぞ」

柗憲が、そう言つて僕の肩を叩いて笑つてみせた。

ずっと走りっぱなしなのに、ホント元氣な奴。

その後も、パスやドリブルが続く。取つたり、取られたり。何度チャンスが巡つてきても、なかなかゴールを狙えない。

そういうする内に、審判が時計を見ながら、終了を告げる準備に掛かる。いけない。もう時間がない!!

僕は渡されたボールをドリブルしながら、ゴールに向かって走つた。

これが決まらなかつたら、試合に負ける。

今にも笛を吹きそうな審判を横目に、僕はゴールに向かって、ボールを投げた。

会場が水を打つたように静まり返る。皆が見守る中、投げたボールは、そのままゴールへと吸い込まれて行く。一瞬の間を置いて、体育館が揺れるような歓声が聞こえて来た。それと同じくして、試合終了の笛が鳴り響く。

やつた、勝つたんだ!!

「圭介、やつたじゃん!!」

そう言つて、柗憲が僕の首を羽交い絞めにする。一緒に試合をした連中やクラスメイト達も寄つて来て、髪はぐちゃぐちゃにされるし、何度も叩かれるし、最後には何が何だか判らなくなつていた。

でも、とても気分が良かった。僕も、少しは《あいつ》に近付くことができたかな。

「おめでとう!! やつたね。すごく格好良かったよ」

試合の後、早坂美咲の鏡を探すのに走り回つたツケを、早々に払わされた。試合中のベンチ待機を怠つたり、廊下を走り回つた挙句、ごみを撒き散らしたまま放置したり。それら諸々の事で、放課後は職員室へ呼び出され、先生に叱られるハメになった。おまけに、トイレの個室で独り言を言つてなんて、妙な噂は立てられるしき。もう散々だよ。

でも、職員室から戻つてくると、妙子が僕の鞆を持って待つてくれた。

「やだなあ。それ程でもないって」

締りのない顔で笑うと、照れ隠しの様に頭を掻いた。

「本当だよ。スポーツ大会の時より、ずっとずっと格好良かったもん。今度こそ、近寄り難くなっちゃったな」

スポーツ大会で活躍したのが《あいつ》だつて事、気付いてないのかな。妙子は淋しそうな笑顔を、僕に向けた。

「そんな事ないよ。僕はいつだつて変らない。でも妙子には関係ないよね。だつて格好良い彼氏を作るんだらう?」

「圭介の意地悪。そうだよ。今年こそは彼氏を作ろうって思つたの。けど、止めた。そんな事になったら、圭介、いつまで経つても彼女の一人も出来ないでしょ。そんな可哀想な圭介、見てられないもん。だから、この妙子さんが引き受けてあげる事にしたの。感謝しなさいよ」

偉そうに。結局、妙子だつて他に彼氏が出来ないのは同じじゃないか。

「そんなに気を使わなくても、僕には早坂さんがいるから大丈夫だよ」

妙子に見えないように舌を出す。

子供の頃から、妙子を揶揄うのが好きだったんだ。喧嘩になったら、泣かされてたのはいつも僕の方だけだね。

「圭介なんか、相手にされるもんですか。だいたい早坂さんが好きなのは、こつちの圭介じゃなくて、鏡の向こうの、でしょう?」

「なんで妙子がそんな事知つてんのさ」

「意地悪な圭介になんか、教えてあげない」

「意地悪な圭介になんか、教えてあげない」

「意地悪な圭介になんか、教えてあげない」

「意地悪な圭介になんか、教えてあげない」

「意地悪な圭介になんか、教えてあげない」

「意地悪な圭介になんか、教えてあげない」

そう言つて、僕に向かつて舌を出してみせる。

早坂美咲は何も言つてないって言つてたけど、あの時《あいつ》は、妙子に何か言つたのかな。

「なんてね。嘘だよ、教えてあげる。男子の決勝戦が終つた後、早坂さんに呼び出されたの。あたし、謝られちゃつたんだよ。あのお高く止まつた早坂さんがつて、ちよつと信じらんなかつたけど。でね、色々話してる内に、お友達になつちやつた。すごいでしょ、あの早坂さんとお友達だよ」

色々話をした？ 何の話をしたんだか知らないけど、余計な事は、言つてないよね？ 美咲ちゃんの記憶が残つてたら、家でやらかした醜態とか、妙子にバレたら一生笑いものだよ。

訳知り顔の妙子の微笑が、更に僕を不安にさせる。何だか怖くなって、早々に話を交える事にした。

《あいつ》の事だけで手一杯なのに、これ以上妙子にまで弱みを握られるなんて、冗談じゃない。それに、僕はまだ妙子の事、どうするかなんて決めてないんだからな。

「それはそうとき、妙子。バイト紹介してくれるって言つてただろう？ あれ、どうなった？」

「何よ、行き成り。どうもなつてないよ。圭介、話聞いてくれないんだもん。あたしのバイト先の人に、バイト探してる人がいるんだけどって言つたら、人が欲しい場所があるからって言われてるの。圭介、やる？」

「妙子と同じバイトつてのが気になるけど。良いよ、やる。妙子つて、何のバイトしてたんだった？」

「遊園地のハンバーガー・ショップよ、あたしはね。でも、圭介がやるのは、ミラー・ハウスの」

「ミラー・ハウス!! 冗談じゃないよ。これ以上、鏡なんか見たくくない。やめやめ。バイトなんかやんない。鏡なんか大嫌いだ!!」

僕はそう怒鳴つて、妙子から逃げ出した。

ミラー・ハウスなんて鏡だらけの所、働ける訳ないだろう。鏡に映らない事、隠しようがないじゃないか。

「ちよつと、圭介。何よ、せつかく待つてあげたのに、先に行つちやうな

んで酷いじゃない!! 圭介の馬鹿!!」

後ろから妙子の怒鳴り声が聞こえてきたけど、僕は構わずに走り続けた。家に帰つたら、まずは今日の活躍を《あいつ》に自慢しながら、一緒にお酒でも飲もう。今日はコンプレックスを愚痴る事もなく、気分良く飲めそう。《あいつ》も美咲ちゃんの事で落ち込んでるだろうからね。今日位は慰めてやろうかな。

気分よく鼻歌を歌いながら部屋に入ると、壁に掛つた鏡に向かつて声を掛ける。

「おい、帰つてるか？ 一緒に飲もうぜ」

父さんの書斎から持ち出したウィスキーの瓶を持ち上げて見せると、鏡の中で微笑んでいる《あいつ》と目が合った。  
嫌な予感がする。

「やつと帰つて来たな。ずつと待つてたんだ。実はお前に頼みがあるんだよ。交差点を曲がるうとしたら、バイクで引つ掛けちまつてな。悪いんだけど、身元、探してくれないか？」

もう、勘弁してくれよお!!

こんな《あいつ》と別れる方法をこ存じな方、どうか僕に教えてください。

完